

賦何人連歌（水無瀬三吟） 一卷

井 本 農 一

本書は、山岸徳平博士旧蔵書で、包紙に「水無瀬三吟百韻 一卷ノ十数年前求琳琅求之 岸廼舎ノ昭和十五年春」と墨書してある。のちに本学に移譲され、現在は「山岸文庫」として本学付属図書館に収蔵されている。

いわゆる水無瀬三吟については今更詳述を要さないであろうが、室町時代の長享二年（一四八八）正月に、宗祇がその弟子肖柏・宗長と共に卷いた三吟百韻の連歌である。故太田武夫氏蔵山田通故筆『三吟百韻』の端作りに「長享二年正月廿二日 後鳥羽院御影堂奉納」とあり、沖森直三郎氏蔵の室町期書写の卷子本には「水無瀬法楽長享正月廿三日」とある由である。また宗祇の句集『下草』にはこの百韻の発句を収録して「水無瀬廟法楽に」と詞書を付してあるから、この百韻はかつて後鳥羽院の離宮があり、その崩御後同地に営まれた水無瀬の御影堂に、法楽のため奉納されたと考えられている。二十一日は、後鳥羽院が延応元年（一一三九）二月二十日に隱岐で崩御されているので、その月忌に当り、また長享二年は延応元年から数えて二百五十年に当る。

この一卷の制作された日については、小西甚一博士蔵の注釈書（江戸期書写）の巻頭に「肖柏御案内者にて、宗祇撰州へ下向之時、山ざきにとまり給ての会と也」とあって、これによると宗祇・肖柏・宗長の三人が、水無瀬に近い山崎に泊り、正月二十二日にこの一卷を巻いたことになるが、また「於種玉庵」と注記する一本もある。種玉庵は京にあった宗祇の庵号である。伊地知鐵男氏は『実隆公記』紙背文書の中にある長享二年正月廿三日付三条西実隆宛の宗祇書状と、『実隆公記』正月二十日の記事に宗祇が実隆を訪い古今集切紙及び源氏物語三箇事について面授口訣し、越えて二十三日に源氏物語三箇事の切紙を届けていることを挙げて、この間の二十二日に宗祇が撰州下向の途中山崎に泊ることはあり得ないとされた（日本古典文学大系『連歌集』解説）。従

うべきであろう。正月廿二日と諸書にある日付は、おそらくは水無瀬宮へ奉納した日を示すのであろう。仮に正月二十二日が制作の日を示すとしても、宗祇等は京にいて（多分種玉庵で）一卷を巻いたものと推察される。

いわゆる水無瀬三吟百韻の写本は多く、古写本に、前引のほか柿衛文庫藏宗長筆卷子本・天理図書館藏伝宗鑑筆卷子本、桂泰藏氏藏卷子本・酒井宇吉氏藏連歌百韻集本所収本その他があり、続群書類従本・同校本もあって、字句の異同や作者の異同はあるが、全体として非常に大きな異同と目すべきものはない。

本書は、縦一六・五糎、横は見返しを除いて一〇枚をつないだ卷子本であるが、それぞれは、次の通りである。

見返し	一四・五糎	第六紙	四九・八糎
第一紙	四八・五糎	第七紙	四九・五糎
第二紙	四九・〇糎	第八紙	四九・五糎
第三紙	四九・五糎	第九紙	四九・五糎
第四紙	四九・五糎	第十紙	一七・五糎
第五紙	五〇・〇糎		

紙のつなぎ目の状況などから推測するに、元来は鳥の子紙五枚であったものを、卷子本に仕立てたものと思われる。書写の年代は、伊地知鐵男氏の推定では、室町時代永正―享祿頃である。筆者は不明、ただし宗祇・肖柏・宗長ではない。卷子本に仕立てるときに順序を間違えたらしく、第四紙以下第七紙までの間に錯簡がある。正しくは、第一紙・第二紙・第三紙・第七紙・第六紙・第四紙・第五紙・第八紙・第九紙・第十紙の順になるべきである。見返（横一四・五糎）に蘭の画があるが、おそらくは卷子本に仕立てるときに添えたものである。また見返に「山岸文庫」の印記がある。

翻刻に当っては、原本の字詰、行数等を変えず、なるべく原稿の形を尊重したが、紙の変り目を『で示し、『の前にそこまでの紙数を示し、次行に次の紙数を示した。ただし解説に記したような紙の入れ違いによる順序の錯乱があるが、翻刻では、正しい句順に直しておいた。写本の現在の紙の順序は、（ ）の中に記入しておいた。

賦何人連歌

雪なから山もと
かすむゆふへ哉

宗祇

ゆく水とをく

肖柏

梅にほふさと

川かせに一むら

宗長

柳春見えて

舟さすをとも

祇

しるぎ明かた

月や猶霧わたる

柏

夜にのこるらん

霜をく野はら

長

秋はくれけり

ともなく草枯て

祇

かきねをとへは

あらはなる道

柏

山ふかきさとや

嵐に送るらん

長

なれぬすまのそ

さひしさもうき

祇

いまさらに獨ある

身をおもふなよ

柏

うつろわむとは

(見返)』
1 (1)

かねてしらすや

置わふる露こそ

花にあはれなれ

またのこる日の

うちかすむかけ

くれぬとや鳴つゝ

鳥のかへるらん

みやまをゆけは

わく空もなし

はるゝまも袖は

しくれのたひ衣

我草まくら

月やゝつさむ

いたつらにあかす

夜おほく秋深て

夢にうらむる

萩のうはかせ

みしはみなふる郷

人の跡もうし

老のゆくゑよ

なにゝかゝらん

色もなきことのは

をたにあはれしれ

それともなる

ゆふくれの空

長

祇

柏

長

祇

柏

長

祇

柏

長

祇

柏

祇

3
(3) 2』

雲にけふ花ちり
はつる嶺こえて
きけはいまはの
春のかりかね
おほろけの月かは
人もまてしはし
かりねの露の
爍の明ほの
すゑ野なる里は
はるかに霧立て
ふきくるかせは
ころもうつこゑ
さゆる日も身は
袖うすき暮ことに
たのむもはかな
つまぎとる山
さりともこの世の
みちは尽はてゝ
こゝろほそしや
いつちゆかまし
命のみまつことに
するきぬくになれや
なをなになれや
人のこひしき
君を置いてあかす

長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇

4
(7) 3

もたれをおもふらん
そのおもかけに
にたるたになし
草木さへふるき
都のうらみにて
身のうぎやとも
なごりこそあれ
たちねの遠から
ぬ跡になくさめよ
月日のすゑや
夢にめくらん
このきしをもちし
舟のかきりにて
又むまれこぬ
法をきかはや
あふまてとおもひ
の露の消かへり
身をあき風も
人たのめなり
松むしのなくね
かひなき蓬生に
しめゆふやまは
月のみそすむ
鐘に我たゝ
あらましのね覚して

長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇 長 柏 祇

5
(6) 4

いたゞきけりな
 よな／＼の霜
 冬かれのあしたつ
 わひてたてる江に
 ゆふしほ風の
 とをつ舟人
 ゆくゑなき霞や
 いつくはてならん
 くるかたも見ぬ
 山さとの春
 しけみよりたえく
 のこる花おちて
 このもとわくる
 道の露けさ
 秋はなともらぬ
 岩屋も時雨らん
 苔のたもとに
 月はなれけり
 心あるかきりそ
 しるぎ世すて人
 おさまるなみに
 舟いつるみゆ
 朝なきの空に
 跡なきよるの雲
 雪にさやけき

柏 祇 長 祇 柏 祇 柏 長 祇 柏 長 祇 柏

6
 (4)
 5』

よものとを山
 嶺のいほ木のはの
 のちも住あかて
 さひしきならふ
 松かせのこゑ
 たれかこのあかつき
 おきをかさねまし
 月はしるやの
 旅そかなしき
 露ふかみ霜さへ
 しほる秋の袖
 うすはなすゞき
 ちらまくもおし
 鶉なくかたやま
 くれてさむき日に
 野となる里も
 わひつゝそすむ
 かへりこはまちし
 おもひを人やみん
 うときもたれか
 こゝろなるへき
 むかしよりたゞあや
 にくの恋の道
 わすられかたき
 世さへうらめし

長 祇 柏 長 祇 柏 長 祇 柏 長 祇 柏 長

7
 (5)
 6』

山かつになと春
 秋のしらるらん
 うへぬ草のは
 しけき柴の戸
 傍にかきほの
 あら田かへしすて
 ゆく人かすむ
 雨のくれかた
 やとりせん野を
 鶯やいとふらむ
 さよもしつかに
 さくらさくかけ
 ともしひをそむくる
 花に明そめて
 たかたまくらに
 夢はみえけん
 ちきりはやおもひ
 たえつゝ年もへぬ
 いまはのよはひ
 山もたつねし
 かくす身をなき
 にも人はなしつへし
 さてもうき世に
 かゝる玉の緒
 松のはをたゝあさ

祇 柏 長 祇 柏 長 祇 柏 長 祇 柏 長 祇 柏 長 祇

8 (8) 7

8

ゆふのけふりにて
 うらはのさとよ
 いかすむらん
 あき風のあらいそ
 枕ふしわひぬ
 かりなく山の
 月ふくる空
 こはき原うつろふ
 露もあすやみむ
 あたのおほ野を
 こゝろなる人
 わするなよかきりや
 かはる夢うつゝ
 おもへはいつを
 いにしへにせむ
 仏たちかくれては又
 いつる世に
 かれしはやしも
 春かせそふく
 やまはけさいく霜
 夜にか霞むらん
 けふりのとかに
 みゆるかり庵
 いやしきも身を
 おさむるは有つへし

祇 柏 長 祇 柏 長 祇 柏 長 祇 柏 長 祇 柏 長 祇

9 (9)

人にをしなへ
みちそたよしき

長

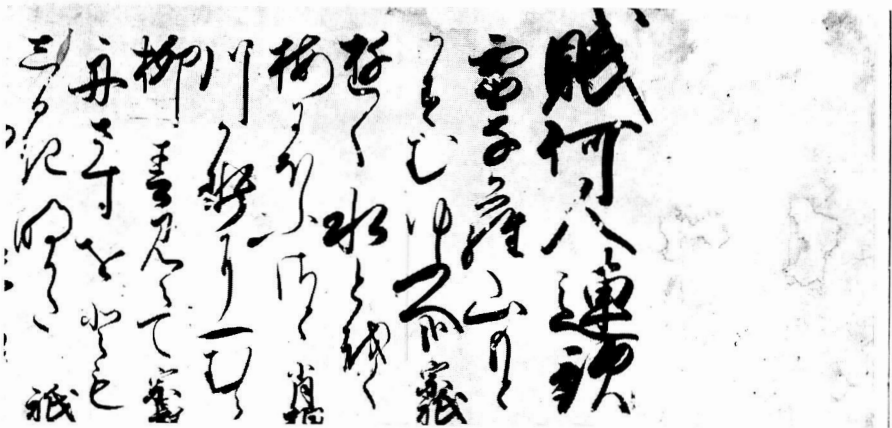
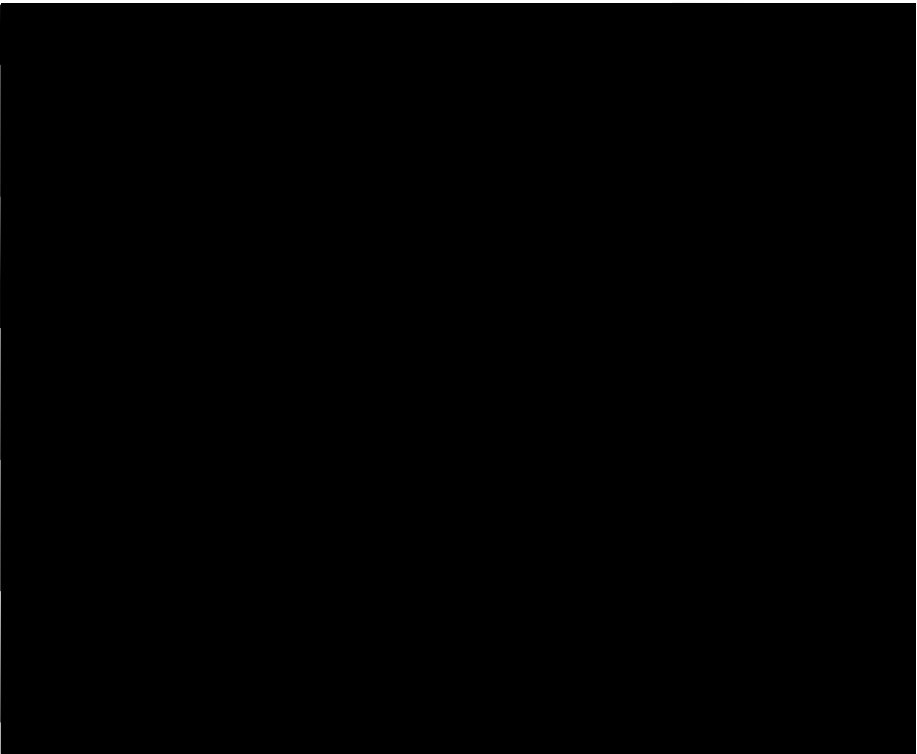
10
(10) 9

宗祇 卅四
肖柏 卅三
宗長 卅三

宗祇 卅四
宗長 卅三
宗長 卅三

二冊

宗長 卅三



口絵8 「賦何人連歌」(水無瀬三吟)(卷子本)本文冒頭